

道の上で見た話

小川未明

青空文庫

いつものようにぼくは坂下の露店で番をしていました。

このごろ、絵をかいてみたいという気がおこったので、こうしている間も、物と物との関係や、光線と色彩などを、注意するようになりました。また坂の上方の空が、地上へひくくたれさがって、ここからは、その先にある町や、木立などいつさいの風景をかくして、たとえば、あの先は海だといえ、そうも思えるように、いくらか空想の余地あるおもしろみが、だんだんわかってきました。

その日は、からつとよく晴れていました。ただおりおり風が、砂ほこりをあげて、おそいかかるので、気持ちがおちつかなかったけれど、毎年、夏のはじめには、よくある現象でした。

ちようど、若い女が、店の前へ立つて、石けんを見ていましたが、ここをはなれて、あちらへいきかけたときです。とつぜん、坂の上から、おそろしい突風が、やってきて、あつというまに、女のさしている日がさをさらって、青空へ高く、風車ののように、まきあげました。それは、またはなやかなアドバルーンのようにも、糸が切れた風船玉のようにも、うすべに色をして、美しかったのです。そして、日がさは、くるりくるりと

まわりながら、あてもなく飛んでいくのでした。

このとき、通りかかった人々は、たちどまって、上をむき、あれよ、あれよといってさわぎました。けれど、なかには、自分になんの関係もないできごとといわぬばかり、ふたたび見あげようともせず、さつさといくものもありました。こんなさいちゆうに、たぶんこのあたりをうろつく、浮浪児でしょう。

「おれが、ひろうぞ！」と、叫んで、二、三人往來の人をかきわけ、かけていきました。風に、日がさをさらわれた、女の人は、顔を赤くして、とりかえしのつかぬことをしたと思つたのでしょうか。いそいで、その方向へいきかけましたが、五、六歩もいくと、きゆうに思いとまって、もどりかけました。そして、店の前まできたので、
「そんなに、遠く飛んでは、いきませんよ。」といって、ぼくは女の人を力づけようと思いました。

「いえ、だれかすぐにひろつてしまいますでしょう。」と、彼女が答えて、もはや、あきらめたように、いつてしまいました。

こう聞いたとき、ぼくは、なんということなく、悲しかったのでした。
なんで、女は、あきらめなければならぬかと思つたからです。自分のものでありながら、

それを保証する道德のなかったこと、こんな、よいわるいの分別がなくなるまで、社会がくずれたかという、なげきにほかありません。

健全な秩序のなくなるということは、まっ暗な晩を、あかりをつけずに、道を歩くようなものです。ぼくには、ちょうど、そんなようなわびしきを感じたのでした。

二、三日前のこと、ぼくは、おなじ通りで、古本店を出している、おばさんから、童話の本を借りてきて、番をしながら読みました。そして、それに書いてある話に、ふかい感激をもちました。

それは、こういう話です。

おおかみが、群れをなして、すんでいました。どこへいくにも、先頭にたつのは、一ぴきの年とつたおおかみでした。なぜなら、このおおかみは、もう長い間、山に生きて、いろいろの経験をして、このあたりの山中なら、どんな道も知っていれば、どこへいけば、なにがあるということから、またいろいろのばあいについて、だれよりも知識がふかかったからです。

たとえば、病気のときには、どの草を食べればいいのか、敵に追われたときは、どの谷へおりて、どの岩の間にかくれるとか、そのことは、とうてい、若いおおかみたちの知

るところではありませんでした。

それだけでなく、かれは、敵と出あつて、たたかわなければならぬときも、自分は相手のいちばん強いやつをひきうけるといふうでしたから、みんなから、尊敬されていました。

しかし、この年とつたりこうなおおかみも、鉄砲のたまをふせぐことはできなかったのです。ある日、りょうしにうたれて、きずついたからだで、みんなといっしょに、山の安全なところまでにげのびてきました。そして、ついに、力つきてたおれました。

「今夜、わしは死ぬだろう。」と、年とつたおおかみは、いいました。

おおかみたちは、道案内者を失つたあとの不安と心細さから声をあげて泣きました。

「わしが、いなくなつたら、新しい先達をえらぶがいい。ただ、いかなるばあいでもみんなは、ちりぢりになつてはいけない。たがいに力をあわせて、助けあい、いままでのように、生活をつづけるのだ。」と、老いたおおかみは、いましめました。

夕やけは、さびしい、高い山の間にうすれて、おおかみたちの悲しくほえる声が谷々にこだましたのでした。

「そうだ。ぼくたちも、ちりぢり、ばらばらになつてはいけない。正しい心と心がむすぶ
ついで、おたがいに生きぬく努力をしなければ！」と、ぼくは思つたのでした。

午後になると、ねえさんがきて、かわつてくれたので、ぼくはしばらく、自由のからだ
になりました。

駅へむかう道の上で、なにかあるらしく人々が集まつていたので、自分もいつてみる
気になりました。それは、はじめて見る、悲惨の光景ではなかった。何年か前にも、
どこかで見たことがあるような記憶がしました。やせこけた、あばら骨の出た馬が、全
身に水をあびたようにあせにぬれて、重い車をひきかねているのでした。

それをむりに引かせようとする馬子も、かみはみだれ、顔から、胸へかけて、やはりあ
せがながれ、日にやけたひふは、赤銅色をしていました。そして、身につけている、
みじかい着物は、やぶれていました。

ぼくは、馬の身にもなれば、男のたちばにもなつて考えたのです。なんという、矛盾
した、いたましい事実でしょうか。男に、馬の苦しみをわからぬはずがない。ただ、この
道をトラックや、自転車や自動車、たえず、往来するだけ、男を、いつそういら
だたせたのでした。

馬子は、はらだちまぎれに、あらあらしく、たづなを引くと、馬は、頭を上下にふつて、反抗の意をしめし、前足に力をいれて、大地へしがみつこうとしました。そのたび、ほこりでよれたたてがみが、雲のように波うちました。集まった人々は遠まきして、見物しました。自分に関係のないことは、たいていの人は、冷淡なものです。このとき、どこか、町の喫茶店から、レコードでならす、あまつたるい歌声が流れてきました。そこには、ことなつた生活のあることを思わせました。

ひるまえ吹いていた風がやんで、空は、一片の雲もなく、青々として、火のように、かがやく太陽のやけつくあつさだけでした。しかしどこかのいすに腰かけて、アイスクリームを食べ、つめたいソーダ水を飲む人もあつたでしょう。ぼくは、この馬も、この男も、なぜに休む自由がもてないのかとふしぎに感じました。

すると、見物人をかきわけて、まきゲートルをした若者が前へ出てきました。

「この馬は、一度戦地へいって、帰された馬らしいが、かわいそうに、やせているな。つなをといて、すこし休ませてやんなよ。」

そういつて、馬に近づきました。馬子は、同情者があらわれると、交通の妨害となつて、しかられるのをおそれたけれど、いくぶんか大胆になりました。

「いつから、この仕事しごとをやっているんだね。」と、若者わかものが、聞ききました。

「こんなことをするのは、このごろなんです。」と、馬子まごは答こたえて、つぎのように、身みのうえを語かたりました。

「私わたしは、もと百姓しやうでした。馬うまを持もつて、働はたらいていました。それが、戦争せんそう中に馬うまを徴ちよう發はつされたのです。なんで、わすれよう、つれていく日ひ、馬うまは、ふみきりのところで、電車でんしゃにおどろいて、あばれました。私わたしは、こんなことで、びっくりするんでは、戦地せんちへいつて、大砲たいほうの音おとを聞きいたら、どうするだろうと思おもいましたが、かわいそうにその後ご、どうなつたか知しりません。

それから、自分じぶんも、村むらにいたくなくて、町まちの工場こうじやうで働はたらいたのですが、戦争せんそうがおわつたけど、村むらへ帰かえる氣きがしなくて、こんなことをするようになったのです。この馬うまも、飼かい主ぬしがろくろくえさをやらないので、こんなにやせているのです。もっとも、人間にんげんさえ食くえないのだから、口くちのきけない動物どうぶつは、みじめなもんです。」と、馬子まごは、目めにはいりかけるあせをふきながらいいました。

「おれは、復員ふくいんして、間まがないが、まだ、やさしい顔かおにであわない。戦争せんそうのため、みんな、人間にんげんらしさをなくしてしまつたんだな。いつまでも、こんなだつたら、この国くには

ほろびてしまふだろう。さあ、早く水をくんできて、馬に飲ませてやんなよ。」と、若者は、馬子をうながして、自分は、よこれた馬のたてがみをなでました。

「そんなら、あとを、おたのみします。」と、馬子は、バケツを持つて、あちらへ走つていきました。

始終を見ていたぼくは、たとえ、悲しみや苦しみに、たたきのめされても、正しく生きようとするものには、まだ美しい思いやりがあるのを、真にうれしく、力づくで感じました。

なにを思うか、若者は、ライターで、たばこに火をつけました。青い煙が、たんたんとして、空へのぼつていきました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「みどり色の時計」新子供社

1950（昭和25）年4月

初出：「いづもペン 3巻4号」

1949（昭和24）年4月

※表題は底本では、「道《みち》の上《うえ》で見《み》た話《はなし》」となっている
す。

※初出時の表題は「道の上で見たはなし」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

道の上で見た話

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>